

デッサンのひみつ



菊地澄子・作
松本修一・絵

テッパのひみつ



菊地澄子・作
松本修一・絵

菊地澄子

テツヤのひみつ

ポプラ社 昭和54 (1979)

64p 23.5cm

N.D.C. 913



テツヤのひみつ

(ふるさとの童話21)

著 者 菊地 澄子

1979年10月 発行©

画 家 松本 修一

発行者 久保田 忠夫

発行所 株式会社 ポプラ社

東京都新宿区須賀町5 丁160

電話 03(357)2211<代>

振替 東京 4-149271

写 植 誉工房株式会社

製 版 株式会社光明社 朝日写真製版株式会社

印 刷 暁美術印刷株式会社

製 本 大成紙工業所

定価780円

8093-083021-7764

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

ぼく 山下^{やました}テツヤ、小学^{しょうがく}学校^{こうがく}一年^{いちねん}生^{せい}。ぼく 学校^{がっこう} つまんない、うちへ
かえっても つまんない。

だって、ぼく ともだちが いないんだもん。そりゃあ、ぬいぐるみの

金太郎^{きんたろう}とは ともだちだけどき……。ぬいぐるみの人形^{にんぎょう}じゃ、

ぼくが はなしかけても、へんじもしてくれないもん。

パパは、いつも 「つよい子^こに なれ。まりこに

まけるなよ」 って いうけれど……。

いもうとの まりこは、「よわむし、なきむし、だめな

おにいちゃん」 って、ぼくのこと バカにするんだよ。

ママは、すぐ 「メソメソしちゃ だめよ。

おとこの子^こでしょ」 って おこるんだ。

たんになの 大木^{おおき}先生^{せんせい}も、「ゆうきを

だしなさい」 って いうんだけれど……。

ぼく、だめなんだ。でも、ぼく ほんとにはね、ともだちが ほしいんだ。



1 ぬいぐるみの金太郎

あしたは 五月五日。

ママは、うきうきと テレビの上に 人形を かざっています。

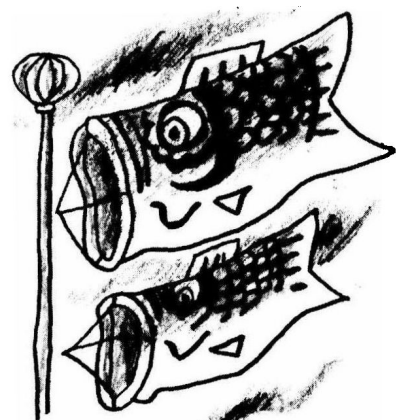
りっぱなひげの しょうきさま、マサカリかついだ 金太郎。きんぴかの カブトに うちのぼり。みんな いなかの おばあちゃんが、テツヤのはつぜつくに おくってくれた 人形です。

かびんに さした しょうぶの かおりが、プーンと へやじゅうに おいます。

「ぼくのも かざってよ。」

テツヤは、ベッドから ぬいぐるみの金太郎を とってきました。

金太郎は、テツヤが ちいさいとき、ママが つくった ぬいぐるみ人



形です。「金太郎のように つよい子に なりますように」と、こころをこめて つくったものです。

はだ色のタオルに スポンジを つめ、手も 足も ぱんぱんに ふくらんだ 金太郎です。④の あかいはらあては、とりはずしできるように なっています。

でも、いまでは 金太郎の みじかい 五ほんのゆびは、テツヤに すわれて ボロボロです。それに、くろい毛糸の おかっぱあたまも あらいざらして はげかけています。

こんな ボロ人形でも、テツヤにとっては かけがえのない ともだちなのです。

「金太郎、よかったね。ここなら おともだちが いっぱい いるだろ。」
テツヤは、ぬいぐるみの金太郎を カブトに よりかからせて すわらせました。

「わあ、バッチイッ。こんなの だめ！」

いもうとの まりこが、ぬいぐるみの金太郎^{きんたろう}を ベランダに ポーンと
ほうりました。

「あら、まりこ。ほうったりしちゃ だめ。」

ママが しました。でも、まりこは、ペロツと したを だして、
くびを すくめるだけ、目は いたずらっぽく わらっています。

「だって、おとこの子^こは お人形^{にんぎょう}なんかで あそぶんじゃないって、パパ
が いったもん。」

まりこは、むねをはって いいます。

テツヤは、ともだちが いません。いつも ひとりぼっちです。ともだ
ちといえ、ぬいぐるみの金太郎^{きんたろう}だけです。ねるときも、ぬいぐるみの金
太郎^{たろう}を だいて ねます。ふろに はいるときも つれてはいり、せつけ
んで きれいに あらってやります。でも、パパも ママも、こんな テ
ツヤを みて、ふかいためいきを つくのです。

ママは、テツヤが もう いいかげんに 金太郎人形^{きんたろうにんぎょう}を てばなしてく



れないかと おもうのです。じょうぶになつてほしいと ねがつて、つくつた 人形にんぎょうなのに、ママのねがいと はんたいに、テツヤはよわむしで いくじのない子になつてしまつたようです。

「テツヤ、その金太郎きんたろう、やぶれてみつともないから ことしは よしましよ。」

ママが、まゆをしかめて いいました。

とたんに、テツヤの目めから じわつと なみだが あふれてきます。

「ほら、おにいちゃんたら　すぐ　なくんだから。」

まりこが、いたずらっぽく　のぞきこみました。まりこは、テツヤよりふたつも　としが下したなのに、おしゃべりで、ちからも　ずっと　つよいのです。

テツヤは、まりこに　やられるだけではありません。学校がっこうでも　いつも　なかされるのです。こんなとき、テツヤは　金太郎きんたろうに　いつけるのです。ほいくえんのときは、おなじ　だんちの　森もり　新子しんこが　テツヤを　まもってくれました。でも、一年生いちねんせいに　なったら　新子しんこのたいどが、きゆうにかわってしまったのです。

かっぱつな　新子しんこには、入学にゅうがくして　すぐ　ともだちができ、テツヤのことなんか　ふりむいてくれません。それに　新子しんこは、ひっこみじあんで　ぐずな　テツヤが、じれったくて　はらがたつのです。

テツヤは、てのひらで　なみだを　こすりながら　ベランダに　でまし

た。くやしそうに　まりこを　にらんで、そつと　ぬいぐるみの金太郎^{きんたろう}を
ひろいあげました。

「いたかったろ、けが　しなかったかい。」

テツヤは、金太郎^{きんたろう}を　しっかり　だきかかえます。

「あつ！」

金太郎^{きんたろう}の　くりくりした　ボタンのひとみが、パチツと　とじたのです。
ほんとうです。たしかに、テツヤに　ウインクしたのです。

テツヤは、くびを　かしげて、ボタンの目^めだまを　つまみました。いつ
もとかわらない　かたい　くろまめのような目^めです。

「おい、目^めが　いたいじゃないか。テツヤ　やめろよ！」

とつぜん、かすれごえがしました。キョロキョロ　みまわしても、ま
りこと　ママだけしか　いません。

「はっははは……。ここ　ここ。テツヤ、おまえの　うでのなかだよ。お
れだよ、ぬいぐるみの金太郎^{きんたろう}だよ。」

金太郎は、パッチリした くらボタンの目を ほそめています。たしかに ぬいぐるみの金太郎が しゃべっているのです。こんなことは、はじめてです。テツヤは、ドキツとして 金太郎を みつめました。

「こ、こ、こわいよう。」

人形を なげだし、あおくなつて ママに とびつきました。

「どうしたの テツヤ。びっくりさせないで。むしでも いたの？ テツヤは ほんとに おくびょうなんだから……。ほら、まりこに わらわれるわ。」

「だって、ぼくの 金太郎が……」

テツヤが いいかけると、足もとに なげだされた 金太郎の目が、キラツと ひかりました。

「いうな！ おれのこえは、テツヤにしか きこえてないんだぞ！」

「……………」

「だれにも いうな！ パパが かいしゃから かえってきても だまっ



てろよ。おれと テツヤの ひみつだからな！」

ぬいぐるみの金太郎きんたろうは、かすれごえで はやくちに しゃべります。テツヤは、おそろ おそろ そばへよって のぞきこみました。すると、金太郎きんたろうが にっこり わらいかけるではありませんか。おもわず テツヤも にっこりしました。

「おにいちゃん、お人形にんぎょうが どうかしたの？」

まりこが、金太郎きんたろうを のぞきにきます。テツヤは、あわてて ぬいぐるみの金太郎きんたろうを ひろいあげ、じぶんのへやに かけこみました。ドアを せにして みみを すますと、

「へんな おにいちゃん。」

まりこの かんだかいこえが きこえてきました。

「はっはは……。テツヤ、おまえ にげあしだけは はやいんだね。そういえば、おまえ きのうも 学校がっこうで、新子しんこって子こに いじめられて べんじょに にげこんだんだろ。」

「うん、新子ちゃんたら、きょうも ぼくを つきとばしたんだよ。」
つられて、テツヤが いいました。

「そうか、新子って そんなに おまえを いじめるのか。」

「うん……」

テツヤは、しよんぼりして いいます。

テツヤは、ほいくえんのころは、「新子ちゃん だいすき」と いったのです。新子も また テツヤのことを 「だいすき」と いったいました。でも どうしたのでしょうか。あんなに やさしく なかよくしてくれた 新子が、一年生になつて すっかり かわってしまったのです。
「テツヤ、しんぱいするなよ。それより、あした おれを 学校に つれていけよ。」

「えっ！ 学校へ？」

小学校は、ほいくえんと ちがいます。それに、「一年生になつたんだから、ぬいぐるみなんか もちあるくんじやないよ」と、パパに いわ

れているのです。

「そうだよ。学校に　いって、おれ、その　森　新子にはやく　あいた
いんだ。」

口を　への字に　まげた　金太郎の目だまが、キラツと　ひかります。
おこっているのです。

（あつ、にてる。このかお、新子ちゃんが　おこったときの　かおだ！）
ふくんと　ふくらんだ　ほつぺた、への字の口。テツヤが　だいている
金太郎が、新子　そっくりなかおに　なったのです。

森　新子は、クラス一の　ちからもち。テツヤと　おなじ　一年生なの
に、身長は　一メートル三十センチ。体重は　テツヤの　二ばいはん。四
十キロもあるのです。

テツヤは、もういちど　ぬいぐるみの金太郎を　じつと　みつめました。
やっぱり、新子　そっくりです。

2 さんすうの じかん

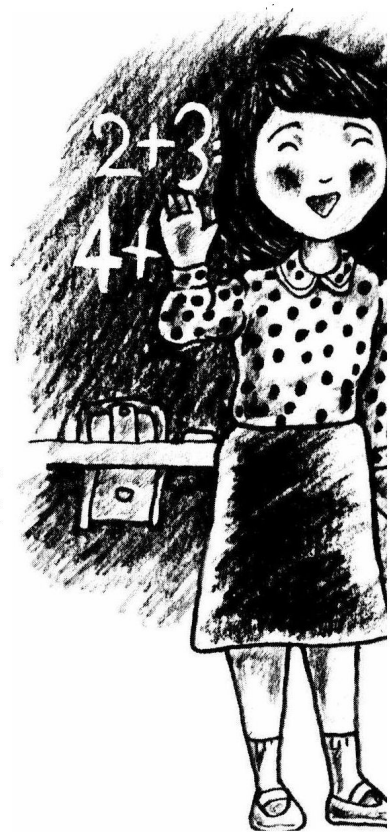
「テツヤ、学校^{がっこう} まだかい？」

ランドセルからはみだしそうになって、ぬいぐるみの金太郎^{きんたろう}が せかします。

テツヤは、いじめっこの 新子^{しんこ}たちが いない 浅川^{あさかわ}どてを とおまわりしたので、三十分^{さんじゅうぶん}も ちこくです。テツヤは、そつと 一年一組^{いちねんいちぐみ}の きょうしつに はいっていきました。すると、いちばんうしろのせきの 新子^{しんこ}が、ちらつと ふりむき、大きなこえを はりあげました。

「あつ、山下^{やました}テツヤだ！ 大木^{おおき}せんせー。テツちゃん また ちこくー。」
それにならって、新子^{しんこ}のこぶんの トキコも、大きなこえを はりあげます。すると、洋太^{ようた}も、

「おつ、ねぼすけ テツヤ。きょうも ねしょんべん たれたのかつ。」



みそっぱを みせて はやしたてました。

「ねぼすけ テツヤ、ヤーイ ヤーイ。」

「ねしょんべんたれ テツヤ、ヤーイ ヤーイ。」

きょうしつじゅうが 大さわぎ。トキコも 洋太も、テツヤと おなじ

だんちで、おなじ ほいくえんでした。それなのに、ふたりとも 新子の
まねをして、クラスのだれよりも テツヤを いじめるのです。

テツヤは、はずかしくて うごけません。きょうしつの うしろにつ
つたままです。むねがあつくなり、じわっと なみだが あふれてき
ます。

「みんな、しずかに！ テツヤくん、なにしてい
たの？ さあ、はやく、せきについて。」

大木先生は、みんなを だまらせ、テツヤの
かたに 手をかけて、やさしく ききます。

テツヤは、かたくなって こたえました。

